

6月は移動の季節！

例年6月は業界の様々なイベントが全国で行われ、その御蔭で「移動」が大好きな私としては「幸せな」季節である。「仕事にかこつけて社長（あるいはお父さん）はあちこちに行っている！」と社員の人も家族からも非難されそうだが、「仕事にかこつけられ」から「いいんです！」。「移動」とは別名「旅」とも言えるが、仕事をしながら「旅」ができるなんて、これ程幸せな事はありませんね！但し「移動」を「旅」と捉えられるか、仕事に必要な「苦役」と捉えるかは、人それぞれ。幸い私の場合は、飛行機に乗ったり、



新幹線に乗ったり、知らない土地に行ったりすること自体が大好きなので、恵まれているのかも知れない。

オリジンはタクシー業に特化して全国展開という事業モデル上、個人差はあるものの、出張が多い会社だと思ふ。70名規模の会社ではあるが、年間の旅費交通費が5千万円前後になる。それだけ多くの人が「旅」をしていると言える。「日常の仕事の中での出張＝移動は、そんな優雅な「旅」とは違います！」と言われそうだが、是非「移動」とお客さまも含む他の地域の人との「出会い」を「旅」として感じて欲しいと思ふ。これもオリジンという会社のビジネスモデルがたまたま与えてくれた「目に見えない報酬」なのかも知れない。出張先の名所、旧跡の観光やおいしいものも、時には時間を作って味わって欲しい！

ところで、本コラム前号の最後に、「あらためての気付き」と見出しをつけて、何やら意味不明の以下の文章を書かせて頂いた。

清野吉光氏のコラム 第55回

団塊 耕 志 録

清野 吉光(きよの よしみつ) 略歴

1950年 長野県四賀村生まれ、松本深志高校卒業。1968年上智大学外国学部ロシア語科入学、1971年 中退。その後印刷関係など様々な職業に従事。1976年清水市の日の丸交通入社。1980年静岡市内の事務機器センターに入社。1982年システムオリジンを仲間と創業、専務取締役。1992年代表取締役社長就任。2000年(株)タクシーサイト創立、現取締役会長。2007年タクシーアシスト代表取締役社長に新任。現在に至る。



タクシー業界の資産は「人財」!

「あらゆる移動ニーズの組織化を無人、IT化で成し遂げようとするパーク24の川上取締役のプレゼンを聞き、逆に、タクシー業界の勝算はただ一点、人が行う移動サービスにしか無い事を、強く強く、感ずる。タクシー産業の持つ強みが人を持つ事と成らなければ未来は無い。」

これは5月にヒルトン東京で行われたテレマテイクスのカンファランスで、パーク24の川上取締役のプレゼンを聞いての、危機感から来る実感であった。

パーク24は、我々も街で良く目にする全国で駐車場管理を展開する会社である。もともとITを駆使した駐車場の無人遠隔管理と決済に定評があり、東証にも上場している優良会社ではあるが、今はレンタカー会社を買収し、さらにカーシェアリングのシステムを展開しつつある。つまり移動の手段である車の、一時駐車を管理する会社がレンタカー、さらにはカーシェアリングという「移動そのもの」を担う仕組みをIT

を駆使して、利便性とコスト低減を両立しながら展開しつつある。もともと駐車場の管理の仕組みがあるので、それと上手に組み合わせ、まさに自家用車のニーズの一定の部分を代替するシステムを創造した!

自家用車需要の代替

加賀市長、寺前秀一氏が2000年に「モバイル交通革命」で提唱した「総合生活移動産業」の重要なキーワードとして「自家用車需要の代替」があった。「月極め定額運賃」などのアイデアも、高齢者の自家用車需要をタクシー需要に転換させるものとして提案された。しかしこうした考えは未だアイデアに止まり、法的にも現実的にも進展していない。

その中で、特にスマホという便利で使い勝手の良い携帯端末を利用者が自由に使える時代になって、自家用車を所有するのではなく「借りたり」「共有したり」する仕組みがすでに存在し、拡大しつつある。彼らは利

便性に拘り、そしてそれをシステム力で、無人でなしとげようとする。利用者がスマホなどのシステムに助けられ、「セルフ」で車による移動をストレスなく可能にする。もちろんこうした利用者層は、従来のタクシーの利用者層とは違うかも知れないが、より鮮明にタクシー業界が目指すべき「総合生活移動産業」の形を、逆説的に暗示するのではないのだろうか？

タクシーは人に拘る！

もちろん、タクシー業界においてもシステム化は進んでおり、ここ数年のスマホによるタクシーの発注や「スマホでタクシー」などの共同配車などの仕組みが、構築されつつある。しかしタクシー産業の持つ、あるいは持つべき本質的な優位性は、多分にこのシステム化の延長には無いだろうと思う（システム会社たるオリジンが言うべき事では無いが）。究極のシステム化はすでにパーク24が手がけ、また多くの公共交通機関が

推進しつつある無人化である。お台場への「ゆりかもめ」など多くの新都市交通は、コンピュータ制御の無人運行である。あの夢のリアモーターカーも、無人運転となる。今の最新のGPS技術、ITS技術を駆使すれば、無人の自動車運行も可能となるかも知れない。あるタクシー会社の経営者が、半分冗談で「乗務員の要らないタクシーが開発されたら良いな！」と言っていたが、技術的には可能になるかも知れない。しかし、そこにはタクシー産業の未来は無いと思う。タクシー産業の持つ資産は人車、通信手段と言われる。問題はこの三つの資産をどう組み合わせ、どのようなサービスを提供できるかだが、人が「運転」をしなくても移動できる時代が到来しつつあるときに、「人」でなければできない移動サービスをどう創造していくのか、という事が問われる。移動サービスを受ける人も「人」であり、その移動サービスが無人の技術では得る事ができない「人間的な



「ホスピタリティに溢れた物であることがこれからは（実は今までもそうだが）決定的になるだろう。」

シティタクシーグループ 訪問

それをあらためて実感したのは、6月8・9日と恒例のタクシー問題懇談会の研修旅行であった。今回は全福協の会長会社である大分のシティタクシーグループ（漢二美社長）を訪問した。観光を含む全二日間の日程を、シティタクシーグループの観光バスの川野さんという乗務員さんと「しげちゃん」というガイドさ



んが案内してくれた。そのおもてなしの細やかさは、素晴らしいものだった。そしてシティグループ本社訪問の折にも、その車、設備サービスの多様性、豊富さもさることながら、一番感じた事は人の持つ力、おもてなしの精神、そしてそれがもたらす心地よさだった。これがシティグループさんの発展の原動力であり、スマホを始めとした先進的な幾多のシステムも、結局その精神をシステム面でも実現したに過ぎないと感じた。すべては「人財」の育成から始まると改めて認識した次第。

（2013年6月23日記）